

# グローバル社会におけるパラダイム・シフト —大学教育経験者の意識変容についての研究法の考察—

恒松直美

## はじめに

本稿では、グローバル社会における高等教育の意義を探ることを目的とし、「大学教育経験者」にとっての高等教育の意味に焦点をあてた研究を進めていくための理論と研究法を探る。現在、大学の国際化について盛んに議論され、多文化共生が現実的な問題となる中、知を構築し世界に発信する場である大学の責務として、地域社会及びグローバル社会との連携が提唱されている。その現状において、留学生を含めた学生にとっての大学の意味を探り、大学教育の文化形成のあり方と学生の支援体制の構築の新しい方向性を考察する重要性は否定できないであろう。1998年に大学審議会が「21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—」という答申を出し、大学の生き残りのための経営戦略について盛んに議論されてきた。高等教育の世界に市場主義的な考えが取り入れられ、経営体としての大学のあり方について積極的に論議が進められてきており、大学経営の研究を今後も発展させていく必要があることは否めない。その現状を踏まえた上で、本稿では、「経営戦略」「学生の確保」「国際競争力」などの経済的効果を目指した大学の経営的視点から大学を分析するパラダイムから「シフト」し、教育を受けている、または受けた学生側の視点から大学の意味を探る研究法について模索する。つまり、「大学と人生」「生きる意味の探求」「学生の人生にとっての大学の意義と意識変容」について、大学教育の実践に生かしていくことを目標におき、留学生や卒業後の社会人までも含めて実体験に基づく分析を国際的視野から試みる研究のための方法論を探る。

現在、大学のユニバーサル化が進み、大学がすべての人に開かれる場となりつつある。インターネットの普及によりオンライン教育も発展し、時空を超えて教育が国際的に提供できる環境が整備されてきている。<sup>1</sup> このように、高等教育が日々変化する状況下、大学経営からの視点に加え、教育を受ける学生の実体験に焦点をあてて、日本の高等教育が実際に学生に与えてきたもの、学生が受け取ったもの、そして学生によるその意味付けについて研究する意義は大きい。本稿では、大学教育経験者を一人の人間として捉え、「人」としての視点からその意識変容を考察するための研究法について考察してみたい。したがって、本稿では「異文化」「留学生」といった枠に捉われず「一人の大学教育経験者」について考察する視点に立ち論じていく。<sup>2</sup>

## スピリチュアリティ及び意識の学際的研究の発展とその教育における意味

現在、スピリチュアリティ及び意識<sup>3</sup>の学際的研究の発展が顕著となっており、心理学、

哲学、宗教学、神学、教育、ビジネス、理論物理学、医学、認知科学、神経科学、行動科学、進化生物学、現象学など幅広い分野で国際的に発展し、学際的に多様な分野を連携させた研究も進められている。近代科学で捉えきれない現実の多様性や、事象と環境との複雑な絡み合いにより近代科学のパラダイムでは解明不可能な意識・心の問題が浮き彫りにされてきた。その状況下、スピリチュアリティの問題は、高等教育及び学生生活に関する研究で最近まであまり取り上げられてこなかった。このことについて、Palmer (1993) は、西洋の伝統的アカデミズムにおける実証主義的、客観的知識を重んじる環境においては、信念・希望・愛などの問題を扱う余地がなかったという見解を述べているが、これは現在の経済的効果からのみ論じられがちな大学のあり方に警鐘を鳴らす指摘でもある。その状況において、近年のスピリチュアリティ及び意識についての学際的研究の発展は目覚ましいものがあり、高等教育のあり方についての研究も発展してきており、学ぶべき点は多い。<sup>4</sup>

科学的見解も含めたスピリチュアリティについての学際的研究の発展は、従来の研究の枠組みの限界を認識した新たな知識構築に向けての動きであり、意識や生きることの意味の模索、生態系を含めた地球・宇宙の中でのすべてのつながりに目を向けたグローバル教育やホリスティック教育とも結びついており、人間として生きることの意味を問い直す試みでもある。さらに、スピリチュアリティ及び意識の問題は、社会科学及び自然科学での諸理論の発展と密接に関連しており、生きる意味と宇宙での共存という「生」についての根本となる課題とも結びつく。これらの相互依存やすべての関連性についての見解を取り入れた教育での取り組みはスピリチュアリティ及び意識の学際的研究の発展と無関係ではない。<sup>5</sup> このような状況の中、因習的な近代科学の枠組みのみに捉われず社会的及び科学的事象を多面的に研究する試みを行っている、アメリカで設立されたInstitute of Noetic Sciences (IONS)<sup>6</sup> は、注目に値する。個人と共同の変革のための意識と経験についての科学研究を推進することを使命とし、認識・信念・意志・直観力等を含めた意識の可能性と効力について研究を行っており、自然科学と社会科学の多様な分野の研究者が携わる学際的研究は注目に値する。

近代科学の枠組みを超えて発展しているスピリチュアリティ及び意識の研究の重要性を踏まえたうえで、教育におけるその重要性について再度考えてみたい。学生の意識・スピリチュアリティを実証不可能な非科学的問題として捉えるかどうかの議論以前の問題として、それが実際に学生の日々の方向付けと生きがい・将来への展望に直接つながる深刻な問題として真剣に取り組むべき重要事項であることを、学生と接する中で日々痛感している。人の意識の問題は、近代科学の枠組みでは実証が困難であることにより<sup>7</sup>、正統な研究として認識されにくく、それが故に研究として取り組まれにくかったことも事実である。しかし、学生の意識の問題は、教育における最も重要な問題の一つであり軽視できない問題であることを教育の場で実感している。

例えば、Palmer (1998/1999 : 8-9) は、学生が学んでいる内容を自身の人生と関連づけられない場合に学生が無関心な態度をとると指摘する。つまり、教授されている内容に対する意識が教授されている内容と共鳴していないことにより、学習内容に意味を見出せないのである。学生が学びと授業外での生活や人生とを関連づけられる知識をどのように切望しているのか、実際にその関連付けは軽視されてきたのかが論題として浮かび上がってくる。Palmer (前掲) は、スピリチュアリティに関する問題は人文科学から自然科学に渡るすべての分野に存在しており、すべてのテーマの真髄にあると論じる。つまり、それは、学生のスピリチュアリティの問題が学びの内容とそれを教える教員と学生との関わりにも深く関連していることを意味する。学びと学生の人生とのつながりについて考える時、学生が自身の道を見つけ出すための支援をするために教員は何をすべきか、そして何ができるかについて考えさせられる。授業で取り組む課題と自身の人生とのつながりを見つめることにより、学生はより深く学び、人生の糧としていくのである。Palmer (1998 : 17)の述べるように、学びの場は常に私的部分と公的部分とが交差する場なのであろう。

## 大学における「知識」とその意味

現在、日本の大学は生存をかけた国際競争にさらされ、経営戦略を模索している。冒頭で述べたように、学生数の確保、大学評価、国際競争力、大学と企業、産官学連携、地域との連携・協力、国際的連携、ネットワーク化など、国際的及び国内の大学の連合化・提携・開放化・共同化が叫ばれ、生き残りのための高等教育の経営的・戦略的発想については多くの研究が行われてきた。競争に勝つための大学の戦略を思考する中、「グローバル社会で活躍できる人材育成」「高等教育改革」「国際競争力」「大学の国際化」「多文化共生」「留学生政策」「大学再生」「大学経営戦略」「生き残れる大学」等、多方面からの研究が進められてきた。大学が存続していくためには経営のあり方についてのこれらの分析は必要である。知を構築し、より良い世界を作り上げていくために、国際社会に向けた人材を育成し、また大学として存続していくために、経済的効果に重点をおいた大学改革や経営戦略についての研究は今後も重要となる。しかし、これまで欠落してきたと思われるのは、それらの試みを教授する側の視点と、それらを教授した学生が実際に大学での学びをその後の人生にどう生かしていったのか、そして人生を振り返った時、大学とは「人」として何であったのか、大学での学びと経験がその後の人生に何をもたらしたのか、についての分析である。学生の大学生活による意識変容とその後の人生への影響、高等教育を受けた留学生にとっての日本留学の意義、留学後の人生及び異文化で生活したことによる意識変容などについてはこれまであまり明らかにされてこなかった。

盛んに議論される大学の国際化やグローバル教育についても、政府や大学が打ち出す政策の中で大学教育を受けてきた「学生」の心・意識・スピリチュアリティについて全人的(holistic)な人間観からの分析をすることなしに、その意義は見えてこないことが懸念さ

れる。大学の国際化やグローバル教育を経済効果や大学の戦略という視点からシフトし、その本来の視点から捉え直す必要がある。金森（2007：521-522）は、「産業社会での有益性」のみを基準にした価値体系や短絡的社会還元という基準が当然視された社会政策を講じている現状について述べ、大学は必ずしも産業社会の価値体系に準じず多極的で分散的な価値構成を持つべき主要な拠点であると論じている。この指摘は、現在の大学戦略に警鐘を鳴らすものである。現在、大学の存在価値が社会から厳しく評価される時代となったが、本来、人間を相手とする教育と研究は、「質」が問題とされるべきものであり、企業的な「利益」「効率」「生産性」等で定量化するものではなかった（Wisdom@早稲田 2008：5）。しかし、知を構築し貯蔵する特別な場所であった大学がその価値を失いつつあり、若年人口の減少により経営が危ぶまれる現状では、議論は、否が応でも利潤へと向かう。大学は人間とアイデアの育成・製造装置であり、そこから生み出されるものが「人」や「思考」であるからこそ、大学の社会的価値は巨大であるという見解（Wisdom@早稲田 2008：vi）に立ち返りたい。

また、大学の国際化政策や留学生政策においても、ただ単に留学生数を増加させることで他大学との競争に勝つことは大学の国際化の促進にならないこと、また経済的効果を狙った国際的人材育成という視点のみでは、本当にグローバルな視点から異文化を理解して国や文化の枠を超え地球規模で世界や異文化の人々と共存できる地球市民を育成する結果にはなり得ないことについての認識が必要である。大学改革におけるメガトレンド3項目、「マシフィケーション」（大衆化）・「マーケティング」（市場化）・「グローバルゼーション」が大学経営の根幹となり（天野 2004：179-184）、競争を勝ち抜くための大学経営と教育に目が向けられがちな現在、大学とは学生の人生にとって何であるのか（何であったのか）を再考することの意義は大きいと考える。それでは、大学で習得した「知識」は学生の人生にとって何を意味するのであろうか。「知識」の習得が、経済的効果を生むことのみ目的として捉えられがちな今日において、大学で教育を受けた者は何のための知識であったと捉え、今それが自身にどう影響しているかと捉えているのであろうか。

大学における「知識」の意味について考え、今後の大学の展望を議論するにあたり、大学進学の意味が変化してきていることについて述べておきたい。高等教育の大衆化、情報化により、「大学」が限られた者のみに可能となる高度な知識習得の場ではなくなってきた。つまり、天野（2004：163-164）が述べるように、大学と他の学校との「境界性」が失われ、大学に入ることが別の世界に入る、という意識が希薄となり、もはや限られた人々に与えられた特権ではなくなるという大学のユニバーサル化が進行している。同時に、19世紀的な学問体系が揺らぎ始め、学問間の境界性を重視するよりも学際的研究が提唱されるようになってきた。このような状況下、大学教育とは何を意味し、実際に何を学生にもたらし、そして将来的に何を目指すべきなのであろうか。天野（2004：164-167）は、カリキュラム改革よりもう一步先の教育改革の問題を考える段階にあることを述べ、1)大

学を知的挑戦の場として再編成、2)人間形成空間としての大学、という取り組みを提唱している。つまり、学生が4年間の学習で何を学び達成したのかという達成感を味わえる仕組みを作り、学問をするものの共同体としての大学を作り上げることである。共同体とは、大学という組織体において重要な意味を持つ、学生同士・学生と教員・学生と卒業生の関係の構築のことである。大学における関係性の問題は、人と人のつながりから始まり国際社会や地球、さらに宇宙レベルでのすべてのつながり<sup>8</sup>や生き物と事象の関連性や、そのような全体の関連性の中での自己の存在の意義を問い直すスピリチュアリティの問題とも関わりあっていると云える。

Laszlo (2008 : 124-125, 138-139) は、自身のエゴから意識変容することが自身の枠を超え多文化や全生態圏・宇宙への畏敬の念及び思いやりと共感を持つことにつながることを述べ、人類全体によって共有される人間的意識を個人が持ち、惑星規模での意識を發展させていく意義を説いている。この思想は、今日盛んに言われるグローバル教育の根幹ともなるべきものである。個々の意識が人生を形成し、人を動かす原動力となり、社会・組織に影響を与え、人の意識によって大学・社会の変容と前進がもたらされるという考えに基づくと、大学教育の意義を探るにあたって教育を受ける(受けた)学生個々の意識について調査を行う重要性が見えてくる。個々の意識は、個人の問題にとどまらず、周囲に影響を与え、組織を変革する力の源となる。したがって、「人の意識」「心」「スピリチュアリティ」を大切にされた教育を目指すことにより、地球規模、さらに大きな規模で人々や社会そして世界に貢献することにつながり、また、それが個々の「生」の意義を見出すことにもなることが理解できる。経済的利益を生み出し産業社会に有益な国民や人材を輩出することを最優先とする方向に向かっている現在の大学教育のあり方を見詰め直すことの意義を再確認させられる。

今大学について盛んに論じられているグローバル化への対応、国際競争力、大学の国際化、経営戦略、といったものは、どのような指標に基づいて判断され、今後は何に基づいて評価がなされるのか、について慎重な判断が問われると考える。例えば、前平(2005 : 28) は、「グローバリゼーションは、国際標準という名で国家間の差異の壁を低くし、均質化、画一化する方向に進行させようとする」ものであり、階層化・一元化された指標の中で自己のポジションを見出すものであると説く。また、上條(2005 : 65) が指摘するように、現在あらゆる情報へのアクセスが可能になったが、「情報操作や情報の偏り」に気づいていない危険性もあり、国際標準の意味についても再考する必要がある。同時に、日本の大学教育を再検討する上で、前述してきたような、常に情報化されてきたキーとなる言葉に踊らされている感がある。これらを踏まえた上で、定型化されつつある大学のあり方のパターンからシフトして学生の意識研究に目を向けることの重要性を強調し、研究方法について次項で考察する。

## 学生のスピリチュアリティの実態調査と研究法：客観的知識と意外性

前項において大学教育とは現在日々変化するグローバル社会において何を意味するのか、学生は、日本の高等教育を通じて何を得たのか、そしてそれがその後の人生にどう影響したのか、についての研究を進める重要性を述べた。しかし、前述したように、日本の高等教育における意識変容の実態についての調査はあまり発展してきていない。例えば、大規模な大学生のスピリチュアリティの実態調査の一つに、アメリカのUniversity of California, Los AngelesのHigher Education Research Institute (HERI)<sup>9</sup>が、2004年に150大学の9万人の学部生に行ったアンケート調査 (HERI 2004) がある。この調査では大学生が自身の将来について真剣に考え、人生の意味の探求をし、日々スピリチュアリティについて渴望している姿が浮き彫りにされている。統計によりスピリチュアリティの問題がこれまであまり重要視されてこなかった現状が提示され、高等教育におけるスピリチュアリティの問題が学生及び職員の「生きること」の根幹に関わる問題として無視できないことが明らかにされている。

これらの先行調査をふまえると、日本においても、スピリチュアリティの枯渇は現実的問題である可能性が高い。<sup>10</sup> 佐々木 (2007: 456) は、「高校生の現実から大学を見る」という投稿 (2007) において、多くの高校生が「自分や人生や社会がわからない」ことに悩み、仲間と取り組む機会や地域の仲間がいない現実において回答を見つける手立てがない現状について懸念を表明している。大学や学部は偏差値によって決まり、学生は考える手立てを知らずに大学生になり、資格・実用・応用を強調し管理される大学改革の中で、学生はますます人生や社会を考えることができないと指摘している。大学時代が「自分と人生を考える」重要な過渡期であることはしばしば指摘されるが、その過渡期の支援のあり方について考察するにあたり、教育を受ける側の学生の意識について着目する必要がある。

Braskamp, Trautvetter, Ward (2006: 29-30) は、人は自己を見る目や目的を媒介として意味があると見なしたことについて時間と才能とエネルギーを投じることを述べ、学生は大学での体験について意味を見つけ、それにより人生の選択をし、行動し、自身の才能を伸ばしていくと述べる。自身についての認識を作り上げる過程で、学生は、自分はいったい誰なのか、社会に自分はどのように貢献できるのか、という大きな問いかけをし、自分の人生の目的を探り、自分の才能を使って目標や夢を達成することを目指し、自分が他の人々にどう役立ち、世界をより良い場所にできるのかを問うていると論じる。Braskamp, Trautvetter, Ward (2006: 30) は、さらに、Lagemann (2003) の述べる、大学においての学生の天職・使命感を育成するための支援の重要性を紹介している。Lagemann (2003: 8) によれば、'vocation' とは、単にキャリアや生計を立てることのみでなく、何かをする強い衝動を感じ、自分を知り、自身の信じること、価値をおくこと、世界において自分はどこに位置しているのかを知ることである。したがって、自身を大学やそれ以外のコミュニティや多様な場面において生かすことでもある。大学教育を受けてきた学生

は、大学において自身の‘vocation’を見出すことができたのであろうか。できなかったとすれば振り返ってみて大学はどのような意味を持っていたのであろうか。

意識研究の実態調査により、学生が本当に求めているものが浮き彫りになることが予測される。例えば、Schlitz<sup>11</sup>・Amorok・Vieten（2007）は、科学の統合的アプローチについての研究において、現代私たちの抱える健康面や社会的な問題は人間の行動によって引き起こされたものであることを論じ、スピリチュアルな体験や実践が私たちの自己や文化、世界との関わり方を変容させる潜在的力をもっていることを明らかにし、それが故に人々が世界観や行動を変化させるプロセスの研究が最優先課題の一つであると論じる。Schlitzらは、スピリチュアルな変容の研究の問いとして、スピリチュアルな経験や実践を通じての人々の変容について何が明らかにされているのか、人生が変わるような変容的体験に共通な要素は何か、変容体験での洞察がいかんして世界観や存在について長期的変化へと変換されていくのか、などの問いを立て、詳細な構造的インタビューを行い質的にコード化する試みを行っている。

大学教育を通じて学生が何を考え、何を体験し、意識に何の変容があったのかを大学経営者が知るためには、詳細な質的調査が必要であると考え。Becker（1990：234）は、質的調査が教育機関を運営する側から必ずしも評価されない理由として、質的調査が教育機関の根本的問題や教育問題の原因を発見する結果になることや、現実的な見地からは過激な解決法を提示する結果となることを挙げている。反対に、量的研究が好まれる要因として、あまり深く分析しないため、実際の取り組みとしては困難で変革に結びつかない解決策を提案する傾向にあることを挙げている。

例えば、近年教育学でも使用されている研究法であるライフヒストリー研究法からは意識変容の調査において学ぶべき点は多い。ライフヒストリー法は学生の意識変容の調査にどのような意義をもっているのであろうか。例えば、Goodson & Sikes（2001、高井・山田・藤井・白松訳 2006：51）は、確固とした普遍の真実を導くといった伝統的な研究観について、ライフヒストリアンからの問題提起をしている。つまり、ライフヒストリアンの主要目的は、「特定の特徴や個人的、主観的な経験を共有する個人や人々の集団が、自分たちに起こった出来事にどのような意味を与え、どのような説明を行うのかを探求するところにある」のであり、普遍性を持った知識の獲得を目標としていない。他方、谷（2008：15-16）は、「事実」に基づき命題・仮説・理論を構成し、観察可能、再現可能、反証可能、一般化可能な事実に基づく理論形成を必要とする「実証主義」から見た、ライフヒストリーの「事実」提示に関する脆弱性を論じている。しかし、同時に谷（前掲）は、ライフヒストリーには確かに「事実」と言えないストーリーが含まれる可能性もあるが、事実もあり、行為の主観的意味を探るライフヒストリーが貴重なデータとなることを軽視すべきではなく、行為の主観的意味を解釈する方法である「解釈学的方法」について提示している。

ここで、あえて学生のスピリチュアリティの調査において、「客観的事実」の提示と

「実証」や普遍性の発見が重要なのではないことを明確にしておきたい。研究者による、学生及び人生を経験した主体についての解釈以前に主体自体の意味づけと解釈を重要視し、その上で研究者が教育や文化的及び社会的背景をもとに解釈する試みを行おうというのである。近代科学の実証主義的思考が重視される中で、客観性や普遍的知識を生み出すと捉えにくい研究法は正統な学問とはみなされにくかった。この状況下では、個々の違いやコンテクストによる違いなどに着目する研究は敬遠される。それに反し個々のあり方や特性、主観に目を向けたポストモダニズムの思想のもとでは、個々の体験にも着目することとなった。また、御厨（2002：24-26）は、オーラル・ヒストリーもデータが多くなれば共通性の析出も可能となり、その汎用性は組織分析や制度分析で求められると論じる。したがって、組織としての特性や問題性を含む組織文化も浮かび上がらせる可能性を持っている。

学生のスピリチュアリティ・意識変容の研究において重要なのは、学生自身が自分の大学生生活をどう捉えているか、それによって自分にどう意識変容が起こったと感じ、それが人生にどのような影響を与えたと捉え解釈しているのか、そしてその解釈によりその後の人生をどう方向付けていったのか、である。個々の学生及び大学教育経験者のそれぞれの学生生活は異なり、目標・方向付け・解釈は異なる。したがって、学生の大学生活における体験とその意味から「客観的事実」を導き出し提示することにはかなりの無理があり、「客観的事実」を提示したとしてもあまりに人工的に枠をはめ、均等化された形での提示になってしまうことを危惧する。学生は自身の人生を自分なりに解釈し、また、その解釈は、本人が自身の人生における多様な経験との関連からのみしか解釈し得ないものであり、他者がかいつまんだ情報をもとに客観的事実として提示することは不可能だからである。仮に他者が解釈をしたとしても、それは解釈をした研究者の体験と知見のもとに自身の社会・文化観と人生観の中で位置づけたにすぎないことを忘れるべきではない。他者が学生本人の人生全体から学生の体験の意味づけを行い、客観的事実として解釈を提示することはあまりに人工的であると考えられる。

それでは、人の意識変容を分析する際、「文化」はどう機能するのであろうか。例えば、Goodson&Sikes（2001、高井・山田・藤井・白松訳 2006：5-6）は、私達が文化というレベルで観察者になるや否や、個人は群集の中に消え、個人が推論によって作られた文化の様式の断片となることを指摘している。そこで、Dollard（1949）に言及し、ライフヒストリーが文化、社会構造、個人の生活の間にある関係を明らかにし、公的な状況による圧力と、その状況を個人が内的に定義することにより生み出される力を明快に示す研究法であると説明する。また、隠され沈黙させられ公の場に出ることのない人々に声を与え、その考えについて表現することをフェミニズム理論は見出したが、これらの見解からフェミニスト研究者はライフヒストリーという研究方法を支持した経緯がある。学生の意識変容の研究においては、学生が、日本社会の中におかれた大学教育という制度から影響を受けつつ、大学生活の中で自己をどう捉えたのか、また、体験の方向付けを行う中で「個」及

び「文化」に属する者として、自身の方向付けをどう行ったか、また実際に日本の文化や制度からの影響は何であったのか、等について学生の声をもとに分析を進める。研究者の側は、研究対象とする学生を単に日本の大学制度の枠組みの中での群集として捉えるのではなく、個々の特異性、個々の複雑な状況やおかれた環境、社会及び異文化からの影響などを考慮した上でそれぞれの意味づけや解釈に着目する必要がある。

谷（2008：10-11）は、主体と文化体系との関係性について、「生活主体は階層構造や地域構造によって客観的に条件づけられ、規定されるだけではない。人は、主体的に生活目標や生活様式を選択し、あるいは創出しながら、自らの行為に意味を付与している」と論じる。つまり、人は、ただ単に集団として文化的に具体化されるのではなく、自ら主体をもって文化と接触し、関わりあい、自分で日々の生活や自分の人生に意味を見出していくのである。日本の大学制度の中で、日本社会における人間関係のあり方や、人生についての考え方などの社会的及び文化的影響を受けながら、大学外の社会や異文化とも接触をする中で、学生は日々自身で何らかの意味づけと選択を行っているのであり、学生の「主体」としての自身の生活・人生への意味づけを無視することはできない。大学時代は、人生において学生生活から社会へと移行する重要な準備期間であり、自身の今後の仕事や人生の方向付けについて日々考える模索期間なのである。

ライフヒストリーの研究方法について考察するにあたり、上述したフェミニスト・リサーチでとられたアプローチから学ぶ点が多い。谷（2008：198）が述べるように、ライフヒストリー・インタビューは、「何よりも、ひとびとの考えや、思想、記憶などのその人自身の言葉でアクセスすることを可能にするもの」であることを考えると、それまで「主体」たり得なかった女性に声を持たせ、自らの人生を主体的に語ることに重要性をおいたフェミニスト・リサーチと同様に、語る者の「主体」への着眼点が要となる。学生の意識変容と大学の意味についても「学生自身」がどう意味づけを行い、自らの言葉でどう表現するか、に着眼することにより、従来の研究の枠組みの中から見えにくかった、学生自身を「主体」とした大学教育の捉え方が浮き上がってくる。ここでの課題は、「あるべき姿」の追求ではなく、明らかにされてこなかった「実際の姿」を知ることである。つまり、大学側からの組織、戦略、方針、目標といった枠組みの中での大学教育の分析ではなく、まさに、学生を主体とした学生の視点を窓として見た大学教育の現実である。

Reinharz（1992：139）は、女性の統一された真正で確実な声などは存在せず、それは模倣であったり、その創造は圧制された結果であったりするという鋭い指摘をしている。つまり、個々の特定で独特な声こそ、実際に毎日を生きた人間の声であり現実である、ということである。<sup>12</sup> Reinhartz（前掲）が、“we should be asking questions about specific histories, specific texts”と主張するように、個々の人間の持つ歴史や体験・テーマを重要視する研究を進める。これに対し、実証主義を重んじる科学的研究手法の立場からは、仮説の設定が重要であり、そこから調査が始まる。しかし、「人間」とは簡単に定義でき

る存在ではない。一人の人間が一生に体験する多様な出来事、すべての行動、多くの人と交わす言葉、そこで感じたこと、その認識と表現、それを聞く人の受け止め方、解釈、その表現、それに対するやりとり、本人の意識変容と人生への影響等の多様な分析項目を念頭におくと、簡単に仮説を提示したり、組織立てて枠組みの中におさまられる事項でもないことに気づく。仮に組織立てて説明が提示された場合、それは一定の限られた人工的枠組みの中で、ある目的のために一時的に一面的にまとめられたに過ぎない。桜井（2005b：15-16）は、仮説を絞りすぎるにより、仮説と直接関係すると思われる質疑応答や話題に終始しがちになってしまい、生活世界を解釈する豊かな知的作業が狭められることを懸念し、意外性や発見に心を開く心構えの必要性を説いている。大学教育経験者の意識に関する質的調査は、社会へと出て行く前の過渡期にある学生の心の葛藤や大学に真に望んでいたこと、大学が学生にとって持った意味・持ち得なかった意味、そして卒業した者が振り返った大学教育の意味が意外な形で表に出す可能性を持つ。つまり、これまであまり統計的調査では表に出にくかった現実である。

もう一点、学生の意識調査においてライフヒストリーやライフストーリーの研究法<sup>13</sup>が、研究対象とされる学生自身に与える影響について軽視できない側面を持つことをここで指摘しておきたい。桜井（2005b：29）は、抑圧された人々のライフストーリーは、語る人々の表現であり、「自らの社会的世界に意味をあたえ、さまざまな問題を明るみに出すばかりでなく、自己理解を促進し、アイデンティティや自らの生き方を創造する助けとなる」と述べている。このカタルシス及びエンパワーメント（小林 2005：112-117）としてのインタビューも、学生の意識変容の研究において意味を持つものとする。実際、教員から大学生活の体験について尋ねられると、学生が驚くほど生き生きと自身の体験を語り始めることが多々ある。大学生活に満足しているか、何か変革してほしいと思うか、大学に望むことがあるか、などについて尋ねられるとたいの学生は、これまで表明する機会がなかったかのように自身の思いを語り始める。また、そのような機会がないことについて伝えようとすることが多い。そして、自身の大学生活が重要視されていることに驚きを感じているようにさえ見える。

さらに、ライフヒストリー研究法と密接に関連したオーラル・ヒストリーについて、語る人のどのような時期にオーラル・ヒストリーについて聞いているか注意するという時代性のバイアスの問題を御厨（2002：22）は指摘する。現在どのような社会状況にあり、語る相手がどのような状況におかれているかという時代性を意識することが重要であるという指摘であるが、これは「体験についての解釈の変化」を意味する。角田（2005：54-55）は、私たちの記憶の社会的文脈への依存性について述べている。思い出とは複雑に交差し融合した現在の社会的フレームのもとで事後構成されるものであり、そのことも客観的事実の提示が意識変容の研究においてはあまり意味をなさないことを証明している。社会的フレームと共に思い出も変化し、「変わらない正当な思い出」はなく、その客観性がない

からこそ、語り手の主観的意味を忠実に表すものであるライフストーリー・インタビューにおけるデータの信頼性が増すのではないであろうか。つまり、普遍的でもなく絶対的でもないものこそが実体験についての人々の記憶の実態なのである。大学教育経験者の意識も自身の人生における各時点での社会的環境によって変容していくことは明らかである。過去の自身の体験についての解釈も、人生のその後の多様な体験により変化していくものである。意味を与えなかったことや重要視しなかったことがあとから意味をなすものに思えたり、また否定的に捉えていた体験について、その後の別の体験によって意味あるものとして解釈し直したりなど、人は皆、人生における体験について常に解釈し直しているのではないであろうか。これらの変容していく自己の人生についての解釈にも注意し、人はどのような要因により意識変容するのかにも注目したい。

また、ライフストーリーは、個人的な主観的意味づけのみの作業ではない。石川（2005：184）は、ライフストーリーを語ることは、自らを取り巻く時代的・社会的状況との関連性の中に自己を位置づけることであると論じる。個人の主観的な意味づけを明らかにするのみでなく、研究対象者がどのような文化的・社会的背景をもとに自らの人生を語っているのかを見ようとするにより、個人の人生のみでなく、その背景にある社会や文化・制度を読み解く鍵ともなる。つまり、学生のストーリーを聞くことは、その背後にある大学の制度・文化・学びの体制について読み解くことでもあるのである。そしてそれが、大学で教育を実際に受けた側からの視点であるということを見落としてはならない。

「個」と「文化」の関わりや、個人を通して文化・制度・組織を読み解く意味について考えるにあたり、科学において事実を構築する人間的枠組みについても言及しておきたい。個々を大きな枠組みに一般化して収める営みは仮説から実証への研究では不可欠であるが、同じ事象が科学における「客観的事実」という枠組みの提示においても見られる。村上（1979：200-201）は、科学の人間性を説くにあたり、自然科学は、決して人間や人間社会から分離された中立の道具ではなく、その時代と社会の基本的なものの考え方、底流となる前提とつながるものであり、科学は人間の営みであると論じている。さらに、専門的な共同体の中で認められた知識と理論に基づいて「事実」が造られる、つまり科学の客観性のゆらぎについて指摘している。換言すると、ものごとを「見る」という行為は、それまで人間が会得した見解と理解力・解釈の範囲で判断し理解し、意味を作ることである。このことについて、村上（1979：165）は、見ることの結果として得られる「データ」は、外から受動的に与えられたものではなく、「人間の感覚と理解の力との協働作業によって能動的に造り出されたもの」と考えるのが正当だと述べる。同様に、文化や制度などの共同体で共有される枠組みは人間が作り上げたものであるが、それが現実における「個」を平均的にならし、意外性を客観的事実の外側におくこととなる。つまり、作り上げられる枠組みである文化や制度が、現実における多様性や個性を範囲外におく機能を果たし埋没させるのである。しかし、果たして人間についての平均的な「客観的事実」は存在するの

であろうか。人間が作り上げた既成の科学的見解が知識構築の枠組みとして機能し、新しい発見の際に抑制として働くように、人間が規定する「文化」もまた枠組みとして機能し、私達はややもすると「個」を見落としてしまいがちになる。既成の枠組みの外にある「個」に目を向けるところから現実が見えてくることを念頭におき、その現実性や意外性を隠してしまう枠に捉われない試みから新しい発見があるという認識のもとに研究を進めたいと考える。

## 結語

教育を受けている、または受けた者の視点から大学教育の意味について考察することの意義とその研究方法について本稿で考察した。大学経営の視点から大学教育経験者の視点へと移すパラダイム・シフトにより、これまで軽視されがちであった大学教育の側面について意外な発見がある可能性もある。既に大学を卒業し就労している社会人等にも自身にとっての大学教育の意味についてのインタビューを開始したが、これまで議論されてきた大学側の期待とはかなり異なる回答も得ており、「視点」が違えば教育の意味が異なることを感じざるを得ない。また、大学生活を通して得たと感じているものは、大学教育そのものというより大学生という立場を通じて体験した環境からの影響が大きい例もあり、あらためて大学教育とは何かについての研究の重要性を感じた。さらに、大学教育そのもののみでなく、そこにいきつくまでの学生の心構えと社会環境及び日本社会における教育全体の中での大学の位置づけについても考察する必要があることもわかってきた。本稿で示したように、多様な研究方法を用いて個々の体験を、文化的・社会的視点及び個人的に固有の視点から見た見解を分析することにより、大学の多様な意味が浮かび上がると同時に人生経験によるその意味の変化についても知ることができる。大学時代は学生から社会人への移行期であり、学生個人も日々自分の将来について考え自分は何をしたいのか探る毎日であろう。実際に大学教育を体験した者及び体験している者の声そのものを中心に据えたパラダイムのもとに研究を進めていき、そこから出てきた声をもとに再度大学教育の今後のあり方についてグローバル<sup>14</sup>な視点を踏まえて模索していく糧としたい。

---

## 注

- <sup>1</sup> 例えば、恒松（2006）参照。
- <sup>2</sup> 日本文化の中におかれた留学生の意識変容や異文化に触れた際の意識変容などについての議論は今後の研究で発展させていく。
- <sup>3</sup> 「意識」という用語を使用した場合、科学的な学術的研究として捉えられる傾向があるが、「スピリチュアリティ」という用語を使用した場合、学術研究の域を超え、かなり多義的に捉えられる傾向にあり、注意が必要である。スピリチュアリティの定義の難しさや日本語とのそり合いの悪さ、その多様性と

学際的研究については、例えば、恒松（2008）を参照。‘Spirituality’ の定義について、Tisdell（2003：28-30）は、「世界における人生の意味と目的探求、全体における他とのつながりや事象の流れにおける真の自己探求についての認識と自己実現」と定義している。Lindholm and Astin（2006：64）は、人生の方向付け、人生の目的、人間の存在を超越した力とのかかわり、世界とのつながり、生の全体性など（Love & Talbot, 1999； Hill, Pargament, Hood, Mc Cullough, Swyers, Larson, & Zinnbauer, 2000； Zinnbauer, Pargament, & Scott, 1999）を挙げている。安野・亀田（2008：44）は「スピリチュアリティ」の高さを測る尺度として、『すべての生命は相互に結びついている』ことについての自分の意見』、『我々は皆、精神的な存在である』ことについての自分の意見』、『人生の意味や目的を探求する』活動に従事しているかどうか』など8項目を挙げている。

<sup>4</sup> 例えば、アメリカの University of California, Los Angeles の Higher Education Research Institute (HERI) が学生及び職員・教員のスピリチュアリティについて大規模な調査を行っているが、詳細については後ほど述べる。

<sup>5</sup> 恒松（2008）参照。

<sup>6</sup> IONSについては、学会の公式ホームページを参照。IONSは1971年に設立され、隔年で国際会議を開催している。現代科学についての論議や新しい統合科学などについては、例えば、Capra（2000, 1997, 1982）、Kafatos（2000）、中村（1992）、恒松（1998）参照。また、1999年より、毎年アメリカの Santa Fe にて ‘International Conference on Science and Consciousness’ と題した会議が開催されている。さらに、アメリカ・アリゾナ州のツーソンでは、1994年から隔年で Toward a Science of Consciousness と題した学会が開催されている。

<sup>7</sup> 例えば、Roger Penrose は量子力学が意識の解明に本質的役割を果たすと主張する（河野 2008：46, Penrose 1989, Penrose 2005）。

<sup>8</sup> 量子物理学と意識研究の関わりや、すべてのものごとのつながりについての議論の発展については、Briggs and Peat（1999）、Kaku（1995）、Wilber（2001）などを参照。

<sup>9</sup> 以降、本稿において、University of California, Los Angeles（カリフォルニア大学ロスアンゼルス校）の Higher Education Research Institute を ‘HERI’ と称する。

<sup>10</sup> 例えば、日本の研究では、HERI作成の “College Students’ Beliefs and Values (CSBV)”（Higher Education Research Institute 2006）という調査票を基にして安野・亀田（2006）が行った、女子短期大学のスピリチュアリティ調査がある。調査は、2007年7月、創価女子短期大学の現代ビジネス学科を履修する1年生を対象に実施された（安野・亀田 2006：26-28）。2年間の教育を通しての学生のスピリチュアリティの変化を探求することにより、「スピリチュアリティを育む教育」の実践内容を思考することを目指し、将来的により幅広い学生に定期的に調査を実施するための予備調査としてこの調査が行われた（安野・亀田 2006：25）。さらに、安野・亀田（2008）は第1回目から9ヵ月後同じ母集団の学生にフォローアップ調査を行い、学生が情緒面の伸びを認識しているという結果を発表している。また、尾崎（2004：79-80）は、大学教養課程におけるスピリチュアル教育プログラムの研究を行っている。

<sup>11</sup> Schlitz は Institute of Noetic Sciences [IONS] 研究所研究部長を経て2008年12月よりIONS会長。

<sup>12</sup> 学生に学生生活についてインタビューを依頼した際に、大変興味を示し、自分の考えと体験を述べな

がらも、自分の例は自身の体験に限られたものであり、学生全体を代表していないことを強調したことが印象に残っている。どの学生の体験もその体験自体が学生自身にとっては「事実」であり、代表的な体験など存在しないが、代表的例が実際に想定上存在するような錯覚を抱きがちなのも事実であろう。

- <sup>13</sup> 例えば、桜井（2005a：8-9）は、ライフストーリー・ライフヒストリー・オーラルヒストリー・ナラティブは概念の標準に差異があるが類似の概念であるとしている。ライフヒストリーは、語られるライフストーリーに加え、個人的伝記に類似している面を持つが、オーラルヒストリーは、歴史的経験や過去の出来事の表彰に焦点が当てられるライフヒストリーの下位概念であるとする。さらに、桜井（前掲）は、注意点として、ライフストーリーは、語り手と聞き手の相互行為によって生み出されるものであること、「語られること」が「語る」行為と結びついていることを挙げている。
- <sup>14</sup> 「グローバル」と「ローカル」の概念を調和させた概念として「グローカル」という新しい概念については、例えば、Vaira（2004：484）、Robertson（1992）；Kellner（2000）を参照。

## 引用文献

- Becker, Howard S., 'Generalizing from case studies', in Eisner, Elliot W. and Alan Peshkin (eds.), *Qualitative Inquiry in Education: The Continuing Debate*. New York and London: Teachers College Press, 1990, pp.233-242.
- Braskamp, Larry A., Lois Calian Trautvetter, and Kelly Ward, *Putting Students First: How Colleges Develop Students Purposefully*. Bolton, Massachusetts: Anker Publishing Company, Inc., 2006.
- Briggs, John and F. David Peat, *Seven Life Lessons of Chaos: Spiritual Wisdom from the Science of Change*. New York: Harper Perennial, 1999.
- Capra, Fritjof, *The Tao of Physics: An Exploration of the Parallels between Modern Physics and Eastern Mysticism (25th Anniversary Edition, Fourth Edition, Updated)*. Boston: Shambhala, 2000.
- Capra, Fritjof, *The Web of Life: A New Scientific Understanding of Living Systems*. The United States: Anchor Books, 1997.
- Capra, Fritjof, *The Turning Point: Science, Society, and the Rising Culture*. Toronto, New York, London, Sydney, Auckland: Bantam Books, 1982.
- Dollard, John, *Criteria for the Life History*. Magnolia, MA: Peter Smith, 1949.
- Higher Education Research Institute: Graduate School of Education & Information Studies, University of California, Los Angeles (UCLA), *College Students' Beliefs and Values Survey*. Retrieved September, 2006,  
[http://www.spirituality.ucla.edu/reports/2004\\_CSBV\\_Survey\\_Instrument.pdf](http://www.spirituality.ucla.edu/reports/2004_CSBV_Survey_Instrument.pdf)
- Hill, Peter. C., Kenneth II. Pargament, Ralph W. Hood, Jr., Michael E. McCullough, James

- P. Swyers, David B. Larson and Brian J. Zinnbauer, 'Conceptualizing religion and spirituality : Points of commonality, points of departure', *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 30(1) March (2000) : 51-77.
- The Institute of Noetic Sciences (IONS) (2007). Retrieved August 15<sup>th</sup>, 2007, [http : //www.noetic.org/](http://www.noetic.org/)
- Kaku, Michio and Jennifer Trainer Thompson, *Beyond Einstein : The Cosmic Quest for the Theory of the Universe*. New York : Anchor Books A Division of Random House, Inc., 1995.
- Kafatos, Menas, 'From Structural Science to Integrative Science', Reception Speech at the Academy of Scientists of Romania, Bucharest, June 23, 2000.
- Kellner, Douglas, 'Globalization and new social movements : Lessons for critical theory and pedagogy', in Burbules, Nicholas C. & Carlos Alberto Torres (eds.), *Globalization and Education Critical Perspectives*. New York : Routledge, 2000, 299-322.
- Lagemann, Ellen. Condliffe, 'The challenge of liberal education : Past, present, the future', *Liberal Education*, 89(2), Spring (2003) : 6-13.
- Laszlo, Ervin, *Quantum Shift in the Global Brain : How the New Scientific Reality Can Change Us and Our World*. Rochester, Vermont : Inner Traditions, 2008.
- Lindholm, Jennifer A. and Helen S. Astin, 'Understanding the "interior" life of faculty : How important is spirituality?', *Religion & Education*, 33(2) Spring (2006) : 64-90.
- Love, Patrick and Donna Talbot, 'Defining spiritual development : A missing consideration for student affairs', *NASPA Journal*, 37(1) Fall (1999) : 361-375.
- Palmer, Parker J., 'Evoking the spirit in public education', *Educational Leadership*, 56(4) December (1998)-January (1999) : 6-11.
- Palmer, Parker J., *The Courage to Teach : Exploring the Inner Landscape of a Teacher's Life*. San Francisco : JOSSEY-BASS, A Wiley Imprint, 1998.
- Palmer, Parker J., *To Know as We Are Known : Education as a Spiritual Journey*. San Francisco : Harper, 1993.
- Penrose, Roger, *The Road to Reality : A Complete Guide to the Laws of Universe*. London : Vintage Books, 2005.
- Penrose, Roger, *The Emperor's New Mind*. Oxford : Oxford University Press, 1989.
- Reinharz, Shulamit, *Feminist Methods in Social Research*. New York and Oxford : Oxford University Press, 1992.
- Robertson, Roland, *Globalization : Social Theory and Global Culture (Theory, Culture & Society Series)*. London, Thousand Oaks, New Delhi : Sage Publications, 1992.
- Schlitz, Marilyn, Tina Amorok, Casandra Vieten, 「いのちの有限性と生命科学 : 一つの山に

通じる多くの道 - 形質転換の科学への統合的アプローチ」島菌進・永見勇 監修  
『スピリチュアリティといのちの未来－危機の時代における科学と宗教－』人文書院,  
2007, pp.282-305.

Tisdell, Elizabeth J., *Exploring Spirituality and Culture in Adult and Higher Education*. San Francisco : Josey-Bass, 2003.

Vaira, Massimiliano, 'Globalization and higher education organizational change : A framework for analysis', *Higher Education*, 48(4) December (2004) : 483-510.

Wilber, Ken, *A Theory of Everything : An Integral Vision for Business, Politics, Science and Spirituality*. Boston : Shambhala Publications, Inc., 2001.

天野郁夫『大学改革 - 秩序の崩壊と再編-』東京大学出版会, 2004.

石川良子「キーワード一覧 14 マスター・ナラティブ」桜井厚・小林多寿子 編『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門-』せりか書房, 2005, pp.183-184.

WISDOM@早稲田 (ウィズダムアットわせだ)『大学は「プロジェクト」でこんなに変わる』東洋経済新報社, 2008.

尾崎真奈美「教育現場におけるスピリチュアリティ」『トランスパーソナル心理学・精神医学』, 2004, 第5巻, 第1号, pp.8-14.

角田隆一「キーワード 4 記憶と信頼性」桜井厚・小林多寿子 編『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門-』せりか書房, 2005, pp.54-55.

金森修「産業社会とは異なる規範を示す空間に」『科学』, 2007年5月, 第77巻, 第5号, pp.521-522.

上條直美「世界と地域を結ぶ学習活動における世界認識の変化 - 地球市民アカデミアの事例を通して-」日本社会教育学会 編『グローバル化と社会教育・生涯学習 - 日本の社会教育第49集-』東洋館出版社, 2005, pp.65-75.

河野哲也『暴走する脳科学 - 哲学・倫理学からの批判的検討-』光文社, 2008.

小林多寿子「第2章 ライフストーリー・インタビューをおこなう」桜井厚・小林多寿子 編『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門-』せりか書房, 2005, pp.71-128.

桜井厚「IV性・民族・医療とライフヒストリー『8.ライフヒストリー研究におけるジェンダー』」谷富夫 編『新版ライフヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 2008, pp.189-219.

桜井厚「はじめに」桜井厚・小林多寿子 編『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門-』せりか書房, 2005a, pp.7-10.

桜井厚「第1章 ライフストーリー・インタビューをはじめ」桜井厚・小林多寿子 編『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門-』せりか書房, 2005b, pp.11-70.

- 佐々木賢「高校生の現実から大学をみる」『科学』, 2007年5月, 第77巻, 第5号, p.456.
- 高井良健一・山田浩之・藤井泰・白松賢 訳『ライフストーリーの教育学－実践から方法論まで－』昭和堂, 2006 (Goodson, Ivor, and Pat Sikes. Life History Research in Educational Settings : Learning from Lives. Open University Press, 2001).
- 谷富夫「I ライフストーリーで社会を読み解く『1. ライフストーリーとは何か』」谷富夫編『新版ライフストーリーを学ぶ人のために』世界思想社, 2008, pp.3-19.
- 恒松直美「短期交換留学プログラムにおける英語による授業の日本人学生への開講－カリキュラムの国際通用性と生涯学習－」『総合学術学会誌』, 2006, 第5巻, pp.29-36.
- 恒松直美「スピリチュアリティの学際的研究－近代科学パラダイム批判とグローバル教育への示唆－」『総合学術学会誌』, 2008, 第7巻, pp.29-36.
- 中村雄二郎『臨床の知とは何か』岩波新書, 1992.
- 前平泰志「グローバリゼーションと〈子ども〉の再制度化－児童労働をめぐる論争を中心に－」日本社会教育学会編『グローバリゼーションと社会教育・生涯学習－日本の社会教育第49集－』東洋館出版社, 2005, pp.23-35.
- 御厨貴『オーラル・ヒストリー－現代史のための口述記録－』中央公論新社, 2002.
- 村上陽一郎『新しい科学論－「事実」は理論をたおせるか－』講談社, 1979.
- 安野舞子・亀田多江「高等教育におけるスピリチュアリティ調査－本学での予備調査から－」『創価女子短期大学紀要』, 2006, 第36巻, pp.23-59.
- 安野舞子・亀田多江「高等教育におけるスピリチュアリティ調査II－フォローアップ調査の評価－」『創価女子短期大学紀要』, 2008年1月, 第37巻, pp.37-55.